地域情報（県別）

# 【神奈川】「今が最も楽しい」開業30年の法人理事長がコロナ禍を経て思う職員の大切さ-村田尚彦・医療法人社団村田会理事長に聞く◆Vol.2

開業後10年はうぬぼれていたかも…「自分だけで地域包括ケア構築は無理」と分かった

2023年10月27日 (金)配信 m3.com地域版

地域包括ケアの構築を目指し、1993年の開業からクリニック、高齢者施設、病院を運営してきた医療法人社団村田会の村田尚彦理事長。理事を3期務めるなど医師会活動にも力を入れ、医師としてさまざまな経験をしてきた今年65歳になる村田理事長は、「今が一番楽しいかもしれない」。相好を崩してそう語る背景には、多職種との触れ合いやコロナ禍での「悪戦苦闘」があった。病院を開設できた経緯や現在の法人内連携についても聞いた。（2023年9月20日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

村田尚彦氏

**――「病院の開設は自治体の整備計画が関わるので簡単ではない」。2019年の取材時に村田先生はそう話していました。2020年に村田会湘南大庭病院を開設できた経緯は。**

1993年に立ち上げた現「村田会湘南台内科クリニック」を2003年に有床診療所に切り替えるころから、「将来的に病院をつくりたい」思いは持ち続けていました。きっかけは、神奈川県が策定する地域医療構想として、藤沢市を含む2次医療圏「湘南東部医療圏」で75床を新設してほしい要望が出たことです。それまでも行政から病床新設の話が出たことはありましたが、希望の数が50床などと少なく、経営上のスケールメリットを得られないと考えて立候補しませんでした。

このときの要望でも採算面から本当は100床ほど欲しかったのですが、「少なくとも70床以上あればぎりぎりいいだろう」と手を挙げました。他の医療機関の希望もあった結果、72床の病院をつくれた次第です。

病院の新設はデリケートなテーマで、場合によっては病院長や開業医から反対される可能性もあります。しかし私たちの場合、周囲の先生方からそんな反応はなく、順調に話は進みました。私が開業以来、藤沢市医師会の活動に参加し、理事も2021年まで3期6年務めたこともプラスに影響しているかもしれません。当時の医師会も「村田さんのところならいいんじゃないか」という雰囲気でした。

**――2019年に県から救急医療功労者表彰を受けた（詳細は『【神奈川】「24時間外来」が評価され、県救急医療功労者表彰を受賞-村田尚彦・村田会湘南台内科クリニック院長に聞く◆Vol.1』を参照）ことからも、そのような背景は想像しやすいです。病院ができたことで、先生が重視する法人内連携も変わったのでは。**

そうですね。医療と介護の連携がより充実したように思います。クリニックが有床診療所だったころも法人が運営する介護老人保健施設などと連携していました。老健では療養だけでなくリハビリも行っているので、クリニックの入院患者さんの退院後に老健でリハビリを行ったり、また老健入居者の具合が悪くなったときにクリニックに入院してもらい、医療ケアを行ったりしていました。

病院は有床診に比べて人と機器が豊富にあるため、こうした連携時にできることが増えました。例えば、老健や当法人が別に運営する住宅型有料老人ホームの入居者の栄養状態が悪化した場合、有床診ではできなかった中心静脈栄養を行って全身状態を回復させ、施設に戻すことができるようになりました。病院には専門性の異なる医師がクリニックより多く在籍しているので、その点でも有床診のころより手厚く入居者をサポートできていると思います。

**――病院では高齢者が多い地域性を考慮して、高齢患者が多い呼吸器内科、脳神経内科、整形外科の診療に注力しているといいます。一方で、現在は小児科も標ぼうしていますね。**

小児科は1年以上前に設け、現在は週に1回、女性の先生が診療しています。病院開設時に地域ニーズを探ったところ、「小児科を置いてほしい」という声もあったんですね。病院がある大庭地区には「湘南ライフタウン」という住宅街があり、こちらには子どもも比較的多く住んでいます。優先順位としてはまず先述の分野の診療を充実させて、周囲の先生方に「あそこに行けば高度な医療を受けられる」と信頼を得たい思いがありましたが、「ゆくゆくは小児科も」と考えていました。

「皮膚科を置いてあげると地域の人に喜ばれるんじゃないかな」という思いも今はあります。皮膚科の患者層は老若男女を問わない一方、湘南台付近には病院とクリニックの1軒ずつしか診療しているところがありません。他の病院が行っていることはそちらにお任せすれば良いので、私たちは地域の需要を踏まえながら足りないものを提供していきたいです。

**――今回は「病院開設3周年」をテーマに取材を依頼しましたが、「開業して30周年」でもあります。村田先生は開業から10年にわたって24時間体制で外来診療を行い、医師会活動に取り組みながらクリニック、高齢者施設、そして病院を運営してきました。多岐にわたる取り組みを振り返っていかがですか。**

「早いな、もう30年経っちゃったんだ」という感じです（笑）。私が行ってきたことの是非は歴史が答えを出すと思うので良いとして、今は愚直に、地域の人に慕われるよう、真摯に医療を提供することが大切。組織が大きくなったことで、「村田さんのとこは天狗になっちゃったな」と思われないよう、自分の信念を曲げずにやっていきたい。

振り返ると、今が一番楽しいかもしれないですね。以前の休みは日曜だけでしたが、今は水曜の午後も休みを取り、この日に各施設を訪問するようにしているんです。事務、看護師、介護士……声をかける職員の表情や口ぶり、仕草からどことなく私との交流にウェルカムな雰囲気を感じて。本当に職員は大事だな、宝だな、と。

**――人材の大切さについては、2019年の取材時にも強調していました。**

開業して10年は、ちょっとうぬぼれていた部分があったかもしれません。当時は患者が右肩上がりにぐんぐん増えていたので、「どうだ」という感じがあったかもしれない。だけど、2003年に老健を開設してからは、「自分だけでは理想とする地域包括ケアの構築は到底無理」と分かりました。老健に在籍する介護士などの働きぶりを見て、お年寄りと良好にコミュニケーションを取り、丁寧にケアしていくのは並大抵の努力ではできないと実感したのです。

「人は宝」とさらに痛感したのは、コロナ禍に直面したときです。慢性疾患の患者さんが多かったことなどからクリニックの患者数はそう大きく減りませんでしたが、この感染症は長期にわたって流行と収束の波を繰り返しています。ある時期には当法人の施設でもクラスターが起き、当然、職員も感染しました。たたでさえ人手が潤沢でないところに追い打ちをかけられるわけです。それでも職員たちは不平不満を言わず、忍耐強く頑張ってくれた。下手したら倒産するかもしれないピンチを乗り切れたのは、本当に職員のおかげです。

**――職員が自分を成長させてくれている、と。以前の取材で「70歳ごろまで働きたい」と話していましたね。**

それくらいまで働かないと、皆が許してくれないでしょう（笑）。産婦人科医である娘が法人を継いでくれる予定は変わっていませんが、もしバトンタッチするとしたら私との専門性の違いも考え、私が介入しつつ徐々にやっていく必要があると思います。私は今年で65歳。そのあたり（継承）のことも、真剣に考えるときが近づいていますね。

**◆村田 尚彦（むらた・たかひこ）氏**

1984年防衛医科大学卒。自衛隊富士病院などを経て、1993年に現「村田会湘南台内科クリニック」を開院。介護老人保健施設や住宅型有料老人ホーム、デイサービスセンターも運営し、2020年7月には「村田会湘南大庭病院」を開院した。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

**記事検索**

ニュース・医療維新を検索